

---

# ありきたりな話し

さより

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ありきたりな話し

### 【コード】

N9863T

### 【作者名】

さより

### 【あらすじ】

放課後の教室、悪態をつく幼馴染、どこにでもあるような、平凡な日……そう思っていた。

「バーカ、こんな漢字もわかんねえのか、間違えてるぜ」  
「うるさいな」

雛子が日直の日誌を書いていると、幼馴染の将也まわやはいつの間にか、机の前に立っていた。

じつと雛子を見つめ、雛子が何か書くごとに、悪態をついている。放課後の教室、時間も遅いため、他の生徒は、皆帰ってしまい2人きりだ。

「はあ、まだ6月なのに今日も熱いな」  
雛子がハンカチで額に流れる、汗を拭く。

「オイ、さっさとしろよ」

「もう！私がやることに、いちいち文句言わないで！」

「なんだと」

「大体将也は、教室に何も用はないんでしょ？なんでいるの？」  
将也は、一瞬言いづらそうに眉をひそめた。

「……こんな時間に、女が1人で帰るなんて…危ねえだろ」  
「えっ？」

意外な将也の言葉に、雛子の胸が、ドクンと音をたてた。

「ほら、後はそこ書いたら、終わりだろ早くしろ」

「…うん」

「どうした？やけに素直じゃねえか」

「そ、そんなことないよ！」

「…ふーん」  
そう言い終わると、将也は黙ってしまった。  
雛子はまだ鳴りやまない心音を、誤魔化すように、また日誌を書き出した。

「……よし、終わった！ 私職員室に、日誌出しに行ってくるけど…」

雛子はチラツと将也を見上げる。

「なら、俺は正門で待ってる、…裏門から帰るなよ」

「裏門からなんて、帰らないわよ！……一緒に帰るんでしょ」

顔をほんのり赤くした雛子を見て、将也は小さく笑い声を出した。

「フツ」

「コラ、笑うな！！私先に行くからね！」

椅子から立ち上がり、バタバタと教室から走り去る雛子。

「……………ああ」

姿の見えなくなった雛子に向かって、将也は笑顔のまま呟いた。

そして、先ほどまで、雛子が座っていた椅子に、何の躊躇もなく座り、

雛子が片付け忘れたハンカチを見つけると、

躊躇なく、まるで自分の物のように、鞆に仕舞った。

「また、手に入った…」

将也は先ほど雛子に見せた、笑顔とは別人のような…

見た人間がぞつとするような、不気味な笑みを浮かべていた。

「でも今日は…もっともつと…大事な者<sup>もの</sup>が手に入るんだ…」

すつと椅子から立ち上がると、将也は門に回って、ゆっくり歩き出す。

ポケットに入った、睡眠薬を握りしめながら……

(後書き)

処女作は、ベタな甘い話しを書こうと、思っていたはずなのに、  
いつのまにか、こんな展開に…

どんでん返しに憧れた結果が、これです。  
憧れたままの方が、良かったかな(笑)

感想がありましたら、お待ちしています。  
誤字、脱字なども、知らせていただけたら嬉しいです。

最後になりましたが、お読み下さりありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9863t/>

---

ありきたりな話し

2011年11月16日14時09分発行